九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「玉しゐのうちに心をまどはすべかりける契り」考：『御津の浜松』最終巻読解ノート

辛島，正雄
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1551330

出版情報：語文研究. 118, pp.19-28, 2014-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「玉しゐのうちに心をまどはすべかりける契り」考

――『御津の浜松』最終巻読解ノート――

辛島正雄

一　問題の所在

本稿と同じ副題を付して、拙稿「『人かた』『人こと』『ひとも』考」（本誌117号、二〇一四年六月）をものしたさい、末尾を、「最終巻の読解をめぐっては（じつは、最終巻に限らないのだが）、なお問題とすべき箇所が少なくない。残念ながら、不審をおぼえつつも、容易には解決のいとぐちさえ見つからないことも多いのだが、あせらず、すこしずつでも、その不審を解きほぐしてゆくことができればと、念じている。」（二七頁）と結んだのであったが、有言実行、そのような実例を、ここでも取り上げてみることにしたい。

右記拙稿では、最終巻の終盤に見える、中納言が吉野姫君へ訴えかけたことばを問題としたのであったが、本稿では、その場面の直後、立坊を目前に控えた式部卿宮が、そうなっては禁中に縛りつけられ、自由に会うことができなくなるとの思いから、無理な算段をして夜ごと姫君のもとを訪れ、思いのたけを訴えるのを、姫君がどのように受け止めたのかについて、検討してみたい。その本文を、遠藤嘉基・松尾聰校注『日本古典文学大系77　篁物語・平中物語・浜松中納言物語』（一九六四年、岩波書店。『御津の浜松』の校注は、松尾氏。以下、『大系』と略称）により掲げれば、次のとおりである。

めでたくいみじき中納言の、たゞいとなつかしうあはれにかぎりなうもてなし給（たまふ）を、またなくたのむかげに見なれにし心なれば、「ゆくりもなくあさましういみじ」と思

ひしみ奉りぬる心なれば、「およびなうさへなり給なば、我身はなにとかはたち出見えたてまつるべき。我身の玉しゐのうちに、心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」と思ひ知らるゝに、あひなうはづかしうのみ思ひまさらるれど、人がらのなよ〳〵となつかしうらうたげなるに、いとありしやうに涙をながし、消えかへりなどはいかでかは。（四二八頁）

問題点の確認のため、『大系』の頭注に示された口語訳によって文脈を辿ると、――「（姫にとっては）立派で大変すばらしい中納言が」、「たゞいとなつかしうあはれにかぎりなう」「姫をお世話なさるのを」、「類なく頼みにする庇護者として」「見なれにし心なれば」、「『思いがけなくあきれるほどでひどくつらいことだ』と（宮のことを）身にしみてお思い申し上げてしまっている（姫の）心なので」、「（宮が東宮に立たれて、自分などの）手のとどかない境遇にまでおなりになってしまうならば、自分の身は何だって（宮の前に）立ち出て見られ申し上げることができようか。」――となり、ここまでの理解については、とくに異を唱えるところもないように思われる。

ところが、一転して、理解に苦しむのが、つづく一文「我身の玉しゐのうちに、心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」である。

ただし、それにつづく「と思ひ知らるゝに」以下についても、解釈に窮するようなところはない。「あひなう」以下の文意についても『大系』の頭注の口語訳によって辿れば、――「恥ずかしがったところで無意味ながら、ただ恥ずかしくばかり思う心が自然一段とますけれど」、「（姫の）人がらがなよなよと馴れしたしみたい感じがして可憐な様子なのに、（今は姫は中納言を頼みにし切って）以前のように涙を流し、幾度も気を失ないなどはどうしてしようか。」――となり、よく理解できる。

二　「我身の玉しゐのうちに……」存疑

その問題となる一文について、まずは、諸注釈書の説くところを確認しておこう。

宮下清計校註『新註国文学叢書　浜松中納言物語』（一九五一年、講談社。一九九九年覆刻、クレス出版。以下、『新註』と略称）では、「およびなうさへ」以下について、頭注で、

姫の心中。自分が宮の許にかうしていつまでも閉ぢ込められてでもゐて、中納言がどうにも手の出しやうがなく

なられでもしたら、自分は何としてか宮の許を逃れ出て中納言に厄介になることが出来ようか。自分といふこの身は、魂の中にある心を惑はすべき運命のきづなにのみ暫し引つ懸つてゐて、それでどうすることも出来ないのであらう。（傍線・圏点筆者。三八〇頁）

と説く。傍線部の口語訳が『大系』の解釈と大きく異なっていて、その影響が圏点部にも及んでいる。それにしても、「魂の中にある心を惑はすべき運命のきづな」とは不思議な言いまわしであり、どのような意味なのか、じゅうぶんには汲み取りがたい。

ついで、『大系』では、まず、頭注において、

「（気がついてみれば）自分の身の魂のなかでもとりわけて、心をまよわすはずであったのだった（前世の）約束程度のことのために、しばらくこんなふうに（宮と夫婦で）あったのであろう」の意か。「こそは」の下に「あらめ」など省略。→補注九三〇。（四二八頁）

と説き、さらに、補注でも、

「玉しゐのうちに」の「うちに」を仮りに「そのなかでも別して」の意（中古に用例がすくなくない）と解いて、「まどはすべかりける」にかけたが、魂と心との関係その他よくわからないふしが多い。再考すべきである。（五〇八頁）

と、問題点を指摘し、「再考すべき」としている。

つづく久下晴康編『浜松中納言物語』（一九八八年、桜楓社。以下、『桜楓』と略称）には、特段の言及はない。

『大系』の疑問に答えるかたちになったのが、池田利夫校注・訳『新編日本古典文学全集27　浜松中納言物語』（二〇〇一年、小学館。以下、『全集』と略称）であり、そこでは、本文を「たましひ」と整え、頭注において、

身に宿って心の働きをつかさどる霊魂。これが遊離すると心は「まどふ」が、「まどはすべき契り」があっても同じという。『源氏』夕霧「たましひをつれなき袖にとどめ置きてわが心からまどはるるかな」。（四三四頁）

と説明し、「わが身に巣食う魂の中に、心を乱させようとした因縁ほどのものがあるために、しばらくこんなことになったのだろうと自然悟られるので」と現代語訳している。

最新の中西健治著『浜松中納言物語全注釈　上巻・下巻』（二〇〇五年、和泉書院。以下、『全注釈』と略称）では、語釈において、

○我が身の玉しひのうち　「我が身の玉しひ」は自身の心の奥底をさす語句か。「人を思ふ我が身の魂はなからなむなしきからは嘆きしもせじ」（宇津保物語・藤原の君、風葉集・巻十四・一〇三七）　**○かゝりけるにこそは**　このよう

であったのであろう。「こそはありけれ」「こそはあれ」などの形で終わっていたのだろう。「かゝりける」とは式部卿の宮と夫婦の関係でいたことをいう。もちろん吉野姫君の望んだことではない。（一二六四頁）

と説き、「自分の心の奥底に、心を困惑させようとした因縁のようなものがあるために、しばらくはこのようなことになったのであろう」（一二六二頁）と口語訳している。

以上、いずれによるとしても、残念ながら、ことごとく明瞭を欠くと評さざるを得ないのであるが、問題点を絞り込むと、『大系』の補注が的確に指摘したように、なによりもまず、「魂と心との関係」がわかりにくい。そのため、『全集』では、「魂と心との関係」について、苦心の説明がなされているのだが、正直のところ、それでもなお、釈然としないものが残る。『全注釈』では、さらに、「我身の玉しゐ」という表現に着目するものの、用例に掲げられた歌の「我が身の魂」は、「自身の心の奥底をさす」ような意味ではないし、「魂と心との関係」については、『全集』が、「（「魂」とは――筆者注）身に宿って心の働きをつかさどる霊魂。これが遊離すると心は『まどふ』」とする説明以上に出るものはない。けっきょく、さまざまな説明をもってしても、いまだ納得のゆく解釈に到り着いていない、とするほかない注釈の現状なのである。

三　吉野姫君と「たましひ」

それにしても、「たましひ」とは、しごくありふれたことばのようにも思われるのだが、じっさいにはどのように使われる語であったか、吉野姫君にかかわる物語のながれに沿って、確認してみたい。すると、前掲拙稿で問題にした場面のすこし前、式部卿宮のもとから中納言によって連れ戻されて以降、しだいに姫君が恢復する様子を描くなかに、次のように見えている。

みし人ひとりも身にそはず、行衛もしらぬうはの空にたゞよひて、あさましくいみじきに、「中納言も我心とあくがれ出たるとや心得給へらん」とおもふかたのいみじうわびしさに、つきごろいみじう思ひ（「ひ」の文字、底本なし――筆者注）くづをれよはりたる人の、はかなき湯をだに見もいれず、よるひる涙ばかりにうきしづみたるに、玉しゐも身にそはずあくがれはて（「はて」は尾上本。底本「はてゝ」――筆者注）、かぎりのさまになり給へりしを、古郷に立帰り、見なれし人〳〵の中にて歎あつかはれ給に、やう〳〵魂もしづまり、心もすこしなぐさみ給まゝに、

かぎりある御いのちのほどは、さのみもえしづみはてられず、いき帰りたるやうに覚えて、あるかなきかによは(と)ういみじき中にも、いとありしやうにはあらずなり行給(ゆきたまふ)。

（網かけ筆者。四二三～四二四頁）

ここでも、『大系』の頭注・補注に示された口語訳を辿ることで文脈を確認してみると、――「（式部卿宮から誘拐されたときは）自分の見知った人が一人も身に添わないで、どこへ行くのか行方もわからない中空にただよっているきもちがして、意外でひどく悲しいのに、『中納言も（私が）自分の（自発的な）心でふらふら浮かれ出ているのだと心得ていらっしゃるのであろう』と思う点がひどく（気落ちがして）つらいために、この数か月来ひどくがっかりして衰弱している人（吉野姫）が、①ほんのちょっとした（飲食物である）湯をさえも見向きもしないで、夜昼（流す）涙に浮き沈んでばかりいるので、魂も身に添わずに離れてふらふらとすっかり抜け出して、命が絶えてしまうような様子になっていらっしゃったのに」、「②（今は）住みなれた里に帰って」、「見なれし人〴〵の中にて」「心配のため息をつきつき看護されなさるうちに」、「だんだん（離れて出ていた）魂も落ちついて」、「心もすこしなぐさみ給まゝに」、「（いつまで生きるという）限定のある御寿命のあいだは、そうばかりも沈み果てることもできなくて」、「いき帰りたるやうに覚えて、あるかなきかによはう」「ひどく衰えている中でも」、「いと」「以前のようではなくなって行きなさる。」（傍線筆者）――このように読み解いて、とくに問題はないだろう。

整理すると、吉野姫君は、式部卿宮に匿われているあいだ、絶望のあまり、〈魂〉が身体から離れて、絶命寸前となっていた（傍線部①）。それが、中納言のもとに連れ戻されてからは、手厚い看護のもと、身体から離れていた〈魂〉も落ち着いて、絶望感も緩み、生気を取り戻してきた（傍線部②）、というのである。すなわち、〈心〉が激しく動揺すると、〈魂〉が身体から遊離し、その結果、身体に甚大な影響が出て、生死にかかわる事態となる、というのが、「魂と心との関係」の基本的なありようなのであった。

この物語のなかに「たましひ」の用例は、じつは五例しかない。残りの二例のうち、ひとつは、吉野姫君が式部卿宮によって清水から誘拐されたさいの様子を、

「こはいかなる事ぞ」と思ひまどひ給(たまひ)て、やがてたましゐ(ひ)もなく、物も覚えず、消(きえ)いるけしきなるを、（下略）（網かけ筆者。四〇五頁）

と描いているものであり、右に整理した、「〈心〉が激しく動揺すると（＝思ひまどひ給て）、〈魂〉が身体から遊離し（＝たましゐもなく）、その結果、身体に甚大な影響が出て、生死にかかわる事態（＝消いるけしき）となる」という説明に、ぴたりと合致する。いまひとつは、いうまでもなく、物語掉尾のあの一文である。

（上略）とあるを見るに、「見し夢は、かうにこそ」とおぼしあはするにも、いとゞかきくらし、たましゐ消ゆる心ちして、涙にうきしづみ給けり。（網かけ筆者。四四〇頁）

中納言の動揺と閉塞した暗然たる心情を表現するこの一例を除けば、四例すべては、吉野姫君にかかわるものであった。

こうして見てくると、さきに『全集』が、「これ（＝魂）が遊離すると心は『まどふ』」と説明していたのは、関係性の順序立てが、あべこべだったことになる。しかし、そのような無理を冒しでもしないかぎり、ここを解くことは困難だった、ということでもあろう。それゆえ、「魂と心との関係」についての尋常な理解に基づいて、あらためて、「我身の玉しゐのうちに、心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」という一文を解釈しようとしても、説明がつかないことに、なんの変わりもなかったのである。すなわち、このままでは、論理的に破綻した文章だといわざるを得ず、文意を取ろうにも、まったくお手上げというほかないのだ。

では、どのようにすれば、この難文を読み解くことが可能になるか、視点を変えて考えてみたい。

四　「心をまどはす」吉野姫君

そこで、解釈の混迷をもたらす元凶ともいうべき「玉しゐのうちに」という表現についてはしばらく措いて、つづく、「心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」がいわんとするところについて、考えてみたい。すると、虚心に本文に向き合うとき、「契り」というのは、常識的に見れば、吉野姫君にとっての、式部卿宮との間に結ばれた奇しき宿縁を指す、と理解するのが自然であろう。そして、同様の表現は、後文にも見えているのである。

さきの引用文において、吉野姫君は、式部卿宮が「およびなうさへなり給なば、我身はなにとかはたち出見えたてまつるべき」と思っていたわけであるが、ほどなくそれは現実のものとなり、宮は、「およびな」き位である東宮に立った。すると、さっそくに関白の姫君が裳着を終えて参内するなど、

新東宮をめぐる人間関係には、大きな変化が現れる。そうした記述を承けるかたちで、吉野姫君の様子が、次のように描かれている。

おほかた、吉野のわたりには、かゝる事どもを雲居はるかにうちきゝつる（「つる」は尾上本。底本は「つゝ」――筆者注）わが身の、あとはかなきありさまを思ひ知るに、さばかりの夢をみて、しばし心をまどはすべくこそありけめ、またゆきあひ見たてまつらん思ひは離れはてたれば、いみじう書きつくさせ給御文なども目とゞめらるゝおりもなし。かげろふなどのあらん心ちする身なれば、「いかに」など物を思ひめぐらす心だになし。（四三一頁）

ここでも、『大系』の頭注・補注に示された口語訳によって文脈を辿っておこう。――「大体、吉野姫のところでは、こうした（関白の姫君が宮中に入られたというような）事の数々を、（自分とは隔絶して）雲居はるかな宮中のこととして聞いたわが身の、心細いありさまを思い知るのにつけて」、「（宮の寵愛をうける身となったと思ったのは現実のことではなくて）そういうような夢をみて、しばらく心を混乱させる筈のことだったのであろうが、二度と行き会ってお目にかかり申し上げよう気はすっかりなくなってしまっているから、（宮の）大変行きとどかぬ所のないまでにお書きあそばす御手紙なども自然目がとまるようになる折もない。」「（あるかなきかのはかない身の）かげろうなどが、（かろうじてこの世に）生きているような気持ちがする身なので」、「『どのように（したらよかろう）』などと物事をあれこれと考える気持ちさえもない。」――以上、おおむね穏当な理解であると思うのだが、引用本文中に注記したように、「雲居はるかにうちきゝつるわが身の、あとはかなきありさまを思ひ知るに」は、底本に従えば、「……うちきゝつゝ、わが身のあとはかなきありさまを……」と読むべきであり、そのほうが、より自然な文脈になると思われる。『大系』には、尾上本によって改めた旨のことわりもないので、なぜ「つゝ」の本文でないのか、不審である。たんなる不注意であるにしては、『全集』の本文もまた「つる」となっているので、なにか事情があるのかもしれないが、よくわからない（同じく浅野本を底本とする『桜楓』『全注釈』の本文では、正しく「つゝ」となっている）。

これを問題の一文と比較するとき、次に対照するように、きわめて密接な照応関係が認められる。

A「およびなうさへなり給なば、B我身はなにとかはたち出見

えたてまつるべき。我身の玉しゐのうちに、心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」と、思ひ知らるゝに、（下略）

[a]かゝる事どもを雲居はるかにうちきゝつゝ、わが身のあとはかなきありさまを思ひ知るに、[c]さばかりの夢をみて、しばし心をまどはすべくこそありけめ、[b]またゆきあひ見たてまつらん思ひは離れはてたれば、いみじう書きつくさせ給御文なども目とゞめらるゝおりもなし。

A・Bにおいて、吉野姫君は、式部卿宮が立坊した場合を想定して、そのようになれば、自分のような者は、どうして宮中に出向き、宮に会うことができようか、と考えていた。それを承けて、a・bでは、立坊後の宮の動静を、宮中から遠く離れて伝聞しながらも、再び宮と会うような思いは、すっかり姫君の念頭から消え去った、とする。Dとdでは、姫君が、わが身の不運、はかなさを、痛感している旨が繰り返される。そして、問題のCとcであるが、cでは、あのように宮と夢のような（現実のものとは思えない）関係をもち、そのことで、「しばし心をまどはす」ほかない、わたしの運命であったのだろう、という。それに対して、Cのうち、「心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」でも、「心をまどはす」ほかない宮との宿縁があったというだけで、「しばし」このような（宮との関係をもつ）ことになったのだろう、といっている。すなわち、Cにおいても、cにおいても、宮と不本意な関係をもったことが、姫君にとって、「しばし」みずからの「心をまどはすべ」き、逃れ得ぬ前世からの宿命だった、というのである。このように見てくると、「玉しゐのうちに」は、もはや必要のない表現であったかとさえ思われてくる。

五　「玉しゐ」は「玉しき」の誤りか

ところで、右のような対比をしていて気づかせられるのが、式部卿宮の存在は、吉野姫君にとって、〈遠いもの〉として認識されていることである。そのことは、Aの「（宮が）およびなう（東宮に）さへなり給なば」、Bの「我身はなにとかは（宮中に）たち出見えたてまつるべき」、aの「かゝる（立坊後の）事どもを雲居はるかに（宮中から離れた場所で）うちきゝつゝ」、bの「また（宮中で）ゆきあひ見たてまつらん思ひは離れはてたれば」、すべてにおいて、そのような意識を汲み取ることができる。〈遠いもの〉というのは、ひとつには身分の懸隔であ

り、いまひとつには宮中という特別な場所との距離である。そして、姫君の「心をまどはすべ」き運命は、ほかでもない、〈遠いもの〉と思っていた人と場所とによってもたらされたものなのである。

吉野姫君が、みずからの運命をそのように意識していることを念頭に置き、あらためて、「我身の玉しゐのうちに、心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」を読んでみると、従来、『大系』以下、すべての注釈書が、「我身の玉しゐのうちに」と、ひとつづきに読んできたことに、そもそもの躓きがあったように思われる。ここを、「我身の、玉しゐのうちに心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」と、読点の位置を変えて読めば、「我身の」は「契り」につづくこととなる（唯一、『新註』の本文が、「吾が身の、魂のうちに、心をまどはすべかりける契ばかりに」と読点を付しているのだが、前掲頭注の口語訳からは、「吾が身の」は「かかりけるにこそは」にかかると見ているようである）。そして、「玉しゐのうちに心をまどはすべかりける契り」というのは、「〈遠いもの〉であったはずの人と場所とによってもたらされた」わが運命についての、吉野姫君じしんによる捉え直しであろうと考えられる。すると、「玉しゐ」は、ことさらに「心」と関連づけるような性質の語ではなく、「心をまどはすべ」く定められた、「〈遠いもの〉であったはずの人と場所」を指すことばだったのではあるまいか。そのように考えてきて浮かんでくるのが、「玉しゐ」は、あるいは「玉しき」の誤写ではなかったか、という疑いであり、「玉しきのうちに」と改めることができれば、都のなかにおいて、あるいは、宮中において（そこに住まう高貴なかたのせいで）、「心をまどはすべかりける」云々と、文意を辿ることができそうなのである。

「玉しき」の語は、「玉しきの庭」のかたちで、禁中の庭を表す例が、中世の和歌に散見し、『方丈記』の冒頭に、「タマシキノ都ノウチニ棟ヲナラベ甍ヲアラソヘル、貴キ賤シキ人ノ住マヒハ」（『新日本古典文学大系』本三頁）とあるのも、おのずと想起されるが、中古の用例には乏しい。それでも、『御津の浜松』と同時期のものとして、『相模集』（『新編国歌大観 第三巻』所収）に、次のような例が見られる。

いみじう思ひける人（＝女）を筑紫にやりたる人（＝男）の、「かたらはむ」といひければ、「さりとも、『けしきのもり（大隅国の歌枕「けしきの杜」に、「気色の漏り」を掛ける――筆者注）にはえやあらざらむ』と思ふこそつつましけれ」といひやりたれば、「おしけつばかりも、などや」といへる

人（＝男）に、これより、

あづまぢのささのわたりは　たましきのかたはしにだに
あらじとぞ思ふ（一三九番）

「あづまぢの」の歌を、武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ共著『相模集全釈（私家集全釈叢書12）』（一九九一年、風間書房）では、「東国の方のささのあたりに住んでいたような身分の私など、都の美しい住まいにいられるあなたの恋人として、片隅にだっていられまいと思います。」（二〇〇頁）と通釈し、「たましきの」について、「玉を敷いたように美しい場所の。『東路のささのあたり』と対比させて、男の居る都の立派な屋敷、あるいは宮中をいう。」（二〇一頁）との語釈をつけている。また、『定頼集』（『新編国歌大観　第七巻』所収）にも、

ある人に、式部卿の宮（＝敦康親王）あひ給ふと
ききて、いひやる
かよひすむ人にとはばや　玉しきの宮とわらやと　いづ
れねよしと（一三一番）

と見え、森本元子著『定頼集全釈（私家集全釈叢書6）』（一九八九年、風間書房）では、「玉しきの」に語釈して、「『宮』の枕詞。」（二二四頁）とする。そのほか、『能因歌枕』（広本）に、「たましきとは、みやこなり。」（『日本歌学大系　第壱巻』一三〇頁）とし、『俊頼髄脳』にも、「京　たましきの　といふ」（『日本古典文学全集』本一一八頁）とあるのも、ここを「玉しき」からの誤りと判断する蓋然性を高めるものといえよう。

以上から、「玉しゐ」を「玉しき」と改め、「我身の、玉しきのうちに心をまどはすべかりける契りばかりに、しばしかゝりけるにこそは」と改訂した本文により解釈を試みれば、「わたしじしんの、宮中に身をおいて心を惑わす定めであった宿縁ひとつによって、一時的に式部卿宮と関係をもつこととなったのであろう」のごとくに解することができ、そのように読み解けば、前後の文脈にも、なんの違和感もなく溶け込むのである。（二〇一四年六月稿）

（からしま　まさお・本学教授）